

出会って、**学んで!**

子どもゆめ基金助成活動

TOYAMA子どもの本フォーラム記録集

2010年6月12日(土) 13時より16時

富山県立図書館3階多目的ホール

基調講演 「子どもの願いをかなえる“情報リテラシー”
～学校図書館で育てる子どもの力～」



講師 **鎌田 和宏 氏**

帝京大学文学部教育学科・教職大学院教職研究科 准教授
元東京学芸大学附属世田谷小学校教諭

実践報告



講師 **吉岡 裕子 氏**

東京学芸大学附属世田谷小学校司書

講師 **村上 恭子 氏**

東京学芸大学附属世田谷中学校司書

後援：富山県教育委員会／富山市教育委員会／富山県図書館協会
主催：TOYAMA 子どもの本フェスティバル実行委員会

基調講演報告 子どもの願いをかなえる“情報リテラシー”

～学校図書館で育てる子どもの力～

鎌田和宏氏は、現在は帝京大学文学部教育学科・大学院教職研究科で、教員養成に携わっておられますが今回は、長らく勤められた東京学芸大学付属世田谷小学校での教育実践を中心に基調講演をしていただきました。その概要を報告します。

学校図書館で育てる子どもの力

今やICT(Information and Communication Technology)の世の中ではないのか？なぜ今時、本、学校図書館？と言われたら、どう答えられるでしょうか。

心強い成果として、全国学力調査の専門家会議による分析があります。「授業で学校図書館を活用する」「地域への学校公開日を設ける」といった取り組みに力を入れているところが、学力上位校に多い。国語に力を入れた学校で算数・数学の学力が向上する傾向は今回(2006年)もあらためて確認されたと報道されました。今の子どもたちは高度情報社会に生きているので、情報リテラシーを身に付ける必要があります。習得のためには、学校図書館・図書館・コンピュータネットワークを使いこなせねばなりません。

確かに情報リテラシーのスキルは教えなければなりません、スキルを発揮させる源は好奇心と意欲です。子どもの興味・関心を醸成し探求的・協同的な学びに取り組む中でこそ、情報リテラシーは生きて働くものになります。

小学校1年生Y君の事例

生活作文「あのねノート」に短いたどたどしい作文を書き始めたY君。図書館利用指導を受け、読書記録をする「読書ノート」も書き始めました。調べ方の指導で、昆虫図鑑を知りました。目次、索引、凡例も教えてもらいました。1年生で漢字辞典も国語辞典も使い始めました。

Y君の「あのねノート」では「はなげのけんきゅう」が始まりました。ふとしたことから鼻毛に興味を持ったY君は伸び方について研究を始めたのです。お風呂で実験をし、仮説を立て結果が違った時は本で調べたりもしたのです。そして、3学期。Y君の「あのねノート」には「おまかせしました。はなげのその後をお知らせします」という「はなげのけんきゅう」成果が語られました。

その後、2年生になったY君は妖怪に興味を持ち、妖怪の研究を始めたそうです。Y君が買ってもらった妖怪事典を鎌田先生も買ったそうですが、子ども向けのものではなく、読むには親の援助が必要な本であることがわかったそうです。

「あのねノート」は、宿題にはしなかったそうです。やらされるのではなく、自ら知らせたい、書きたいという思いで取り組みせたいからです。クラスの中でしばらく「あのねノート」の提出が出ない場合は、「最近おもしろいことない？先生、聞きたいな。」と皆に話かけるそうです。

また、子どもが何か尋ねてきた時に「後で」と言って、子どもへの対応を先延ばしすることは禁物です。「後で」の対応では、その時点で子どもが興味をなくしたり、関心が半減したりしてしまっているからです。大事な芽は見逃さないで、すぐに反応して“好奇心や調べたいという意欲”を育てていかなければなりません。

子どもたちは昆虫を捕まえたが名前がわからないので知りたいと思ったら、まず友人・親・先生に聞きます。それで解決できなかつたら図鑑・本で調べます。自らの願いを実現させるために、調べ、読み取り、考え、表現する力と技が情報リテラシーです。

情報リテラシーを育てるための中核をなすのが学校図書館です。学習情報センター・読書センター・教材センターとして機能を発揮できる学校図書館が必要です。そして、有効に機能するためには専門職として学校司書の常勤が必要です。

協働して発展する学校図書館

学習指導要領では、現代社会を「知識基盤社会」と規定し、以下の特徴を挙げています。知識には国境がなく、グローバル化が一層進む。知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間なく生まれる。知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になる。性別や年齢を問わず参画することが促進される。

確かな学力の基盤となるのは言語に関する能力であり、国語科だけではなく、各教科における育成を重視しています。その上で、応用力の育成が求められています。

学校司書が常勤している学校図書館を利用して、授業の進め方を学校司書と相談しながら実践した経験を通して、学校図書館の機能を発揮すれば大きな力になることを実感しました。

講演を聴いて

子どもが意欲や興味を持って取り組むことがいかに大切であり、大人はそれを見逃さないで育てることが大きな力になることを承知しているからこそ、とんでもなく多くの手間をかけて子どもに向き合っているのがよくわかりました。学校図書館も幅広い蔵書を分量も合わせて備えることで、子どもの意欲や興味を支援できます。子どもからの資料相談や先生への資料提供を通して蔵書の質も高まります。教師と学校司書との対等な協働を見せてもらえて、とてもうれしく思いました。

(富山県図書館を考える会世話人 佐伯昌子)

協働する学校図書館」～情報リテラシー教育実践例から学ぶもの～

好奇心あふれる子どもたちの“知りたい”という願いをかなえ、さらには情報リテラシーを育てるために、学校司書として何ができるのか。東京学芸大学附属世田谷小学校司書の吉岡先生(専任フルタイム勤務)の実践例は、多くのヒントを与えてくれる。

情報リテラシーの初めの一步、それは図鑑の使い方から始まる。世田谷小学校では、年度によって若干異なるが1年生の夏休み前にまず目次・凡例、2学期の終わりから3学期には索引を計画的に学習する。吉岡先生は子どもたちを男女ペアにして虫の名前を探したり、ゲーム感覚で楽しく学べる工夫をされている。そして3年生では、吉岡先生から提案され、調べ学習が本格化する前のタイミングを捉えて、国語辞典、さらに国語辞典に載っていないものについては百科事典の使い方を楽しく学習されている。

4年生になると授業そのものとの連携が強くなっていく。思春期に入る前の保健の授業として養護教諭と一時間ずつ担当し、第二次性徴のブックトークを実施。5年生では、「理科が苦手」という子どもたちの眩しさを図書室で耳にされたことをきっかけに、理科の先生に働きかけ、授業の15分間を使って天気ブックトークをされている。『森田さんのおもしろ天気予報』『きみもお天気博士』など6冊を用意し、お天気博士の失敗談も紹介され、子どもたちが自然と興味をもつ内容となっている。

このように吉岡先生の積極的な働きかけによって学校司書と先生方との協働が成立しているのだが、ふだんから先生方とよく話されているようである。

1年生で『エルマーと 16 ぴきのりゅう』のすごろく作りをされたきっかけは、放課後の教員室での会話である。子どもたちが帰った後、お茶を飲みながら情報交換されるとのこと。そこに学校司書も参加できるなんて夢のような話である。エルマーを読み聞かせされている先生の「子どもたちにすごろくを作らせたんだけど…」という話を聞いた後、吉岡先生は、偶然書店で『エルマーのぼうけん』すごろくを発見！すぐに先生に電話されるというフットワークの軽さ！そして、シリーズの『エルマーと 16 ぴきのりゅう』のすごろくが市販されていない、それなら作ろう、という展開は鮮やかである。

このようにして先生方と学校司書とが協働して育ててきた情報リテラシーは、子どもたちの成長と共にしっかりと身についていく。2年生では成長単元において、これまでの図鑑の学習を活かして目次・索引のある図鑑を作ることができるようになる。また、1年生の時から読書ノートを書き続けてきた子どもたちは、6年生になるころには自分自身で考える力がつき、国語の学習にとてもいきてくる。

これらの実践例から、小学校1年生から情報リテラシーを育てることの大切さを感じるとともに、自分も何かしてみたくてワクワクしてきた。子どもたちの願いをかなえるために手助けをすること、そのためのプログラムを考えたり、ブックトークを組み立てたりするのは、とてもクリエイティブな仕事であり、やりがいも感じる。ただし、これは学校司書が一人でできることではない。まずは先生方と授業について話し、子どもたちに何が必要か考えなければならないし、司書教諭の理解も必要である。しかし、授業や子どものことに口を出せない雰囲気のある学校も少なくない。

それでも嘆いているばかりでは前に進めない。そこでこの夏休み、一歩踏み出してみた。ふだんよりゆったりとした雰囲気のある養護教諭に第二次性徴のブックトーク事例を話してみたのだ。しかし、こちらの腰が引けていたためか、うまくいかなかった。残念！次は、司書教諭のクラスに図鑑の利用指導を持ちかけてみてはどうだろう。勤務校は各クラス週1時間の読書の時間を設けているにもかかわらず、中・高学年においては十分に活用されていない。まずはこれを使ってみよう！できることから始めてみよう！少しずつではあるが、学校司書としての可能性を広げていけるような気がしてくる。

富山市学校司書 Y

TOYAMA子どもの本フォーラムに参加して

鎌田氏の基調講演では、図書館を利用した学習を段階的に行うことにより、子どもたちが生き生きと学ぶ力をつけていった具体例を、児童の作文を紹介しながらユーモアを交えて話していただきました。

“情報リテラシー”とは、自らの願いの実現のために、調べ、読み取り、考え、表現する力と技である。学校図書館はこの力と技を育てる中核をなすものであり、現在のIT全盛の今こそ本であり、学校図書館であると力強いことばに元気を貰い、吉岡氏・村上氏の実践報告に期待が広がります。

村上氏は、中学校の図書館は小学校と違い、「図書の時間」のような設定された時間が無く、読み聞かせや本の紹介などによる子どもたちとの接点が極めて少ない場所であるが、だからこそ学校図書館に自ら足を向けてくれる思春期の子どもたちに、記憶に残る1冊の本を手渡すことができる幸せな場所であると話されました。

☆生徒に日常的に利用される学校図書館であるために

1 魅力的な蔵書作り

- ・ 読み継がれてきた本（名作は中学生にとって魅力があるか？）
- ・ 旬な本（評価が定まっていない危険が伴い、悩みながら失敗しながら）
- ・ それぞれの学問分野で、興味を持たせ、面白さを伝えてくれる本
（使われない調べ学習用の高価な本ではなく、自分の目で確かめ探す）

- ・ 成長する上で必要な情報を与えてくれる本

2 効果的なオリエンテーション

3 2週間に一度変わる展示コーナー

個々の本の魅力を伝えるために、一言コメントを付けて展示

4 読みたくなる新刊案内の作成

5 世の中の動きに合わせた本の紹介

☆レファレンスに応え、授業での図書館活用をサポートするために

1 自館の資料に精通する

2 先生や生徒と日常的にコミュニケーションを取る

3 教育の現場を知る努力をする

4 ネットワークの力を活用する

5 レファレンスで使用した資料が役だったかどうかを確かめ、図書館として積み重ねる。

※学校図書館活用データベースHP参照

☆ 学校図書館の魅力とは

1 いろいろな生き方・考え方に出会える（知りたい、学びたい気持ちに応える）

2 学ぶことの意味（受験とは関係なく、今学んでいることがどこにつながっていくのか）を伝えることができる。

3 今読まなくても、いつもそばに本があることをわかってもらう

○ 講演会を終えて

4月に勤務校が異動になり、普段はほとんど休み時間だけの利用ですが、先日たまたま勤務時間に美術の授業が図書館でありました。課題は「自分自身の曼荼羅を描く」漠然とした内容で始めはとまどいでしたが、先生の授業と一緒に聞くうちに、自分の好きなこと・嫌いなことのイメージをふくらませて描くために本を利用することが分かりました。生徒と一緒に参考になりそうな本を探しましたが、まだ蔵書が把握仕切れていない状態でかなり苦戦しました。しかし、授業が終わり最後に2年生の生徒が、「私、学校に入って初めて本を借りた。後輩に自慢してやろう」と出て行く姿に私自身も嬉しくなりました。今回のフォーラムに参加して、魅力的な学校図書館を作るためにまだまだたくさんやれることがあるよと活を入れていただけた気がします。

富山市 中学司書